

「折り合いを考えていくとぼやき」
山口県景観アドバイザー 太田 敦子

最近家庭の事情で福岡市や神戸市などを頻繁に訪れているが、景観についてふと感じていることがある。

全国一様な都市景観になりつつあるという意見をよく耳にするが、私の住んでいる萩市や神戸市・福岡市など特徴のある地域に入ると、一様な都市景観というのは少し言いすぎの感があると感じる。

景観は場所によって必ず異なる。景観の主軸になるのは、やはりその都市の地形に代表される自然景観なのだと改めて気付く。山を背にして海岸までの神戸市や、或いは二つの川に挟まれた三角州の萩市などとても特徴的だ。地形ひとつ捉えても、同じくくりの中で景観を守り育てていく難しさを誰もが感じるはずだ。ましてやこれに都市の発達してきた経緯や歴史などが入ってくると、私などはパニックになる。

まちづくりにおいて、色彩に限らず、建物のデザイン・位置関係・高さなど、構成する要素をよく話し合うが、どんな場所でも唯一共通アイテムになりえるのが緑ではないかと思っている。極論だが、どんな突出した色や奇抜なデザインの建物が配置されても、緑の緩衝体はその奇抜さを緩和してくれる。町並みを古色にしつらえていくと、人間の生活の場の猥雑さが不思議と消えて落ち着いてしっとりとした町並みになるが、商業地の中まですべてというのはなかなか人々の理解を得るのに難しい。人間の主観はまちまちで、色やデザインを一様に統一していくことは難しいが、緑に対しての人間の捉え方は不思議と同じだ。点の緑を面につないでいく。すなわち自然回帰。

やれやれ、景観のことを考えていくと、自分の行為を虚しく感じるのは私だけだろうか。